文種別の、扱いやすい単元構成です。

漢文編 第一部

『論語』――私の古典 高橋和巳……8

一 故事成語
画竜点睛……歴代名画記……14
病入膏肓……春秋左氏伝……16
杞憂……列子……18
塞翁馬……淮南子……20
呉越同舟……孫子……22
学びを広げる 故事をたずねる
故事成語のおもしろさ（合山究）

二 漢詩―近体詩
鹿柴（王維）……26
宿建徳江（孟浩然）……26
涼州詞（王之渙）……27
春夜（蘇軾）……27
送友人（李白）……28
送僧帰日本（銭起）……29
参考 在唐憶本郷（弁正）

登高（杜甫）……30
遊山西村（陸游）……31
学びを広げる 訳詩の試み
漢文を読むために❶ 近体詩の成立

三 史伝
史記（司馬遷）
鴻門之会……
学びを広げる せりふの朗読
四面楚歌……
項王最期……
学びを広げる 項王の生きざま
題烏江亭（杜牧）／烏江亭（王安石）／烏江（李清照）
漢文を読むために❷ 歴史はいかに記述されたのか……52

四 文章
漁父辞（屈原）……54
学びを広げる 対立する人生観
古典の扉 漁師と隠者……57
春夜宴桃李園序（李白）……58
参考 日本永代蔵（井原西鶴）／奥の細道（松尾芭蕉）

『史記』の文章を台本に見立て、せりふとして朗読してみることで、登場人物の心情をより深く理解します。



五 思想―儒家・道家の思想
―論語―
子曰富与貴……62
子曰道之以政……63
子貢問政……63
―孟子―
無恒産而有恒心者……64
不忍人之心……65
―荀子―
人之性悪……67
―老子―
大道廃有仁義……68
無用之用……68
―荘子―
曳尾於塗中……69
渾沌……70
学びを広げる 儒家と道家

六 小説
桃花源記（陶潛）……74
参考 小国寡民（『老子』）
売鬼（干宝）……78
学びを広げる さまざまな「鬼」

七 日本の漢詩文
自詠（菅原道真）……82
山茶花（義堂周信）……82
夜下墨水（服部南郭）……83
悼亡（大沼枕山）……84
無題（夏目漱石）……85
送夏目漱石之伊予（正岡子規）……86
航西日記（森鷗外）……86
池亭記（慶滋保胤）……88
取塩於我国（頼山陽）……90
参考 題不識庵撃機山図（頼山陽）
桜巒春容（林鶴梁）……92
学びを広げる 身近にある漢詩文

漢詩、記録から江戸時代の名所案内まで、日本の漢詩文を幅広く、豊富に取り上げています。

第一部・第二部とも、作品・ジャンルごとのまとまりで学びやすい構成になっています。

漢文編 第二部

『荘子』と素粒子 湯川秀樹……

一 小話
不死之薬……韓非子
三横……世説新語
不顧後患……説苑
学びを広げる 諫言の方法

二 史伝
史記（司馬遷）
廉頗と藺相如
完璧帰趙……110
刎頸之交……114
荊軻
風蕭蕭兮易水寒……117
図窮而匕首見……120
学びを広げる 「列伝」にとりあげられた人々

漢文に見られる思想と自然科学とを結ぶ、**文理融合**の学びにもつながる導入文です。

三 漢詩 古体詩
桃夭……詩経
生年不満百……文選
秋風辞（漢武帝）
飲酒（陶潜）
兵車行（杜甫）
長恨歌（白居易）
参考 桐壺（『源氏物語』）
学びを広げる 朗読会を開く

四 小説
人面桃花（孟棨）……138
酒虫（蒲松齢）……142
葉限（段成式）……146
学びを広げる 小説の翻案
漢文を読むために③ 中国における「小説」……150

大学入学共通テストでも出題された**漢詩**について、第一部で近体詩、第二部で古体詩を取り上げており、じっくりと学ぶことができます。



五 「三国志」の世界
桃園結義
三往乃見
張翼徳大闘長坂橋
学びを広げる 読み比べ『三国志』と『三国志演義』
進遇於赤壁
股肱之力
学びを広げる 「三国志」の世界
古典の扉 神様になった関羽……16

六 思想 思想と寓話
孟子
何必曰利……170
性猶湍水也……171
荀子
青取之於藍而青於藍……172
老子
天下莫柔弱於水……174
荘子
夢為胡蝶……175

人気の高い教材**『三国志』**について、関連する各種作品との読み比べなども交えつつ学びます。

列子
愚公移山……176
韓非子
聖人不期修古……178
墨子
非攻……180
学びを広げる 寓話の意図
古典の扉 諸子の思想と寓話……184

七 文章
師説（韓愈）……186
捕蛇者説（柳宗元）……190
赤壁賦（蘇軾）……194
学びを広げる 唐宋八大家

資料編
漢文基本句法……200
訓読で注意する語……204
漢文参考略年表……(1)
中国参考地図……(3)
春秋・戦国時代要図……(5)
五行・十干／十二支・干支／度量衡表……(6)
太陰太陽暦／二十四節気／節日……(7)

教科書の凡例を提示しています。

## この教科書を使うために

**単元扉**……単元のねらいと学習目標とを示した。

**単元の振り返り**……各単元末には、単元での学習を振り返って確認し、次の学習に生かしていくための振り返りの観点を示した。

各教材の下段には、次の項目を設けた。

- **脚注**……1、2…のように番号をつけ、固有名詞や難解な語句、理解の必要な言葉などを解説した。
- **脚問**……内容理解の手がかりになる箇所に❶と番号を付し、問❶のように問いを掲げた。
- **句法**……漢文理解の基礎となる基本的な句法に❖をつけて示した。
- **訓読で注意する語**……複数の読みがある等、訓読する上で注意が必要な語に＊をつけてを示した。

各教材の末には、次の項目を設けた。

**課題**……文章の内容を理解するための手がかりとなる項目と、理解した文章の内容をふまえ、主体的、協働的にその理解をより深めるための活動とを、問いや作業の示唆の形で盛り込んだ。

**語句と表現**……語句や句法に着目し、語彙力を高めるための問いを設定した。

**学びを広げる**……単元の目標に対応し、言葉の学びを主体的かつ協働的に深め、広げられるような課題を適宜設けた。

**古典の扉**……古典に対する興味や関心を喚起するための発展的内容や解説を示した。

**漢文を読むために**……漢文を学ぶ上での基本的な事項について要点をまとめた。

**読書の扉**……読書に親しみ、読書活動を広げる手がかりとして、教材と関連のある書籍を選び、紹介した。

**参照ページ・行**……「課題」などで教材本文を引用する場合、引用箇所の下に（・）をつけて示した。上の数字がページ、下の数字が行を示す。他教材等を参照する場合（↓ページ）のように示した。

**二次元コード**……適宜、二次元コードを付し、リンク先に学習の参考となる情報を掲載した。なお、次のURLからもアクセスできる。

https://tbqr.sanseido-publ.co.jp/05-seisenkotenl/contents/



単元扉では教材一覧のほか、**学習のねらいを明示**しています。

# 三 史伝

- 作品の背景を理解し、それぞれの登場人物の立場や役割を読み取る
- それぞれの登場人物の性格や心情を読み取る
- 項王の生き方について考える

項羽像

## 史記（司馬遷）

### 鴻門之会

学びを広げる　せりふの朗読

### 四面楚歌

### 項王最期

学びを広げる　項王の生きざま

題烏江亭（杜牧）／烏江亭（王安石）／烏江（李清照）

漢文を読むために❷……歴史はいかに記述されたのか

関連ウェブページ・動画などの参照リンクにアクセスできます。

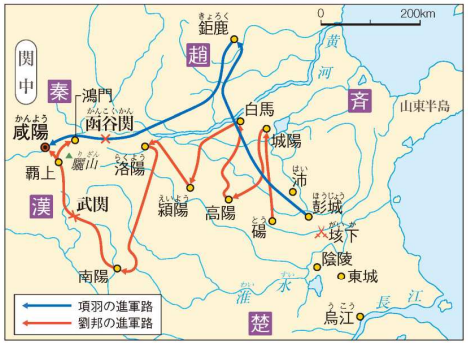
# 史記

## 鴻門之会

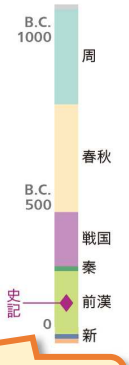
司馬遷

戦国時代を終結させ、初めて中国を統一した秦[1]の始皇帝が世を去ると、秦の圧政に苦しんでいた人々が各地で反乱を起こした。

楚の項羽[2]（項王）は、叔父の項梁[3]とともに挙兵し、懐王[4]を擁立して秦打倒を目指した。一方、沛[5]の人々に推されて秦への反抗を始めた劉邦[6]（沛公）は、各地を転戦しながら項梁の指揮の下に入った。




『史記』関係地図




1 **秦の始皇帝**　前二五九年～前二一〇年。姓は嬴、名は政。

2 **項羽**　前二三二年～前二〇二年。名は籍、羽は字。楚の武将。二十四歳で兵を挙げた。「鴻門の会」の時は二十七歳。

3 **項梁**　？～前二〇八年。秦の軍と戦って死んだ。

4 **懐王**　？～前二〇五年。戦国時代の楚王の子孫。後に項羽によって殺害された。

5 **沛**　現在の江蘇省徐州市沛県。

6 **劉邦**　前二四七年？～前一九五年。字は季。後の漢の高祖。「鴻門の会」の時は四十二歳。

作品の成立時代が一目瞭然の「成立年代バー」で、時代背景を踏まえた読解を行えます。



漢文を読んでいくにあたっての背景情報を丁寧に示し、着実な読解に入っていきます。

項梁が戦死した後、懐王は諸将に進軍を命じ、秦の地を攻略して関中[7]を最初に平定した者をその地の王とする、と約束した。

今や反乱軍の最高権力者となっていた項羽は、河北で秦の主力軍と対戦し、これを打ち破った。他方、劉邦は、河南を転戦しつつ関中に入り、項羽より先に咸陽を制圧した。

咸陽を目指して進軍する項羽は、函谷関[8]を守る劉邦軍に行く手を阻まれ、さらに、劉邦が関中で王となろうとしているとの内通を受ける。激怒した項羽は、四十万もの大軍を率いて十万の劉邦軍を討つ決意をした。

項羽の叔父項伯[9]は、かつて劉邦の側近である張良[10]に命を助けられたことがあり、総攻撃の前夜、ひそかに張良と会って切迫した事態を告げた。やがて劉邦と面会した項伯は、明朝出向いて項羽に謝罪するように劉邦に勧め、項羽には、秦討伐に大功のある劉邦を討つべきでないことを説いた。二人はこれを聞き入れた。前二〇六年のことである。

### 剣舞

沛公旦[1]日従百余騎、来見[＊]項王、至鴻[2]門。謝曰、「臣与[＊]将軍戮力而攻秦。将軍戦河北、臣戦

7 **関中**　秦の都咸陽を中心とする地。現在の陝西省一帯。

8 **函谷関**　戦国時代に秦が設けた関所。現在の河南省霊宝市の南西にあった。

9 **項伯**　？～前一九二年。漢の建国後に諸侯に取り立てられた。

10 **張良**　？～前一八九年。劉邦の参謀。兵法に優れていた。

1 **旦日**　翌朝。

2 **鴻門**　現在の陝西省西安市臨潼区。項羽の宿営地。

＊**訓読で注意する語**

見　与

教材本文のページは**シンプルなレイアウト**で、文章の読みに集中しやすくなっています。



河南。然不自意、能先入関破秦、得復見将軍於此。今者有小人之言、令将軍与臣有郤。」項王曰、「此沛公左司馬曹無傷言之。不然、籍何以至此。」

項王即日因留沛公与飲。項王・項伯東嚮坐、亜父南嚮坐。亜父者、范増也。沛公北嚮坐、張良西嚮侍。范増数目項王、挙所佩玉玦、以示之者三。項王黙然不応。范増起出、召項荘、謂曰、「君王為人不忍。若入前為寿。寿畢、請以剣舞、因撃沛公於坐、殺之。不者、若属皆且為所虜。」荘則入為寿。寿畢曰、「君王与沛公飲。軍中無以為楽。請以剣舞。」項王曰、「諾。」項荘拔剣起舞。項伯亦拔剣起舞、常以身翼蔽沛公。荘不得撃。

▣沛公の発言から、どのような意図が読み取れるか、話し合ってみよう。

▣范増と項王の心情はそれぞれどのようなものか、説明してみよう。

効果的な注釈や**発問**が、スムーズな読解を助けます。

3 郤　仲たがい。
4 左司馬　官名。軍事をつかさどる。
5 曹無傷　伝未詳。沛公の臣下。
問❶「此」とは何を指すか。
問❷会見の場における項王以下の位置関係は、どのようになっているか。
6 東嚮　東に向く。「嚮」は「向」と同じ意味。
7 亜父　父に次いで尊敬している人。「亜」は「次ぐ」という意味。
8 范増　前二七五年～前二〇四年。項王の参謀。
9 目　目配せをする。
10 佩　腰に下げる。
11 玉玦　環状でその一部が欠けている玉（宝石）。ここでは「決」に同音の「決」をかけて、沛公を殺す決断をせよ、と暗に迫った。

12 項荘　生没年未詳。項王のいとこ。
13 為人不忍　人柄として、残酷なことができない。
14 為寿　酒杯をささげて健康を祈る。
15 属　一族。



16 翼蔽　親鳥が翼でわが子を覆い隠すように、かばい守る。

『鴻門会』（安田靫彦筆　1955年）

❖句法
- 令A B　Aに B させる。［使役］
- 不然（不者）　そうでなければ。［仮定］
- 何以～　どうして～か、いや～ない。［反語］
- 為所～　～される。［受身］
- 請～　～させてください。［願望］
- 不得～　～できない。［不可能］

＊訓読で注意する語
然　能　者　因　与　若　且　則　亦

## 課題

一　項王と沛公の性格がよく表れている部分をそれぞれ指摘し、比較してみよう。

二　項王側と沛公側のそれぞれの登場人物について、心理と役割とを整理してみよう。

## 語句と表現

一　「謝」（37・14）について、文中で使われている以外の意味を調べ、それぞれの意味でこの字を用いている熟語をあげてみよう。

二　「辞」（41・1）と「辞」（42・2）について、それぞれの意味でこの字を用いている熟語をあげてみよう。

## 学びを広げる　せりふの朗読

▣「鴻門之会」の本文を台本に見立て、せりふの朗読をしてみよう。

①四、五人のグループに分かれ、登場人物とその発言（せりふ）を確認する。言葉を発していない登場人物もいるので注意しよう。また、発言ではない部分については、内容を検討し、読むか読まないかを適宜判断しよう。

②登場人物それぞれに読む人を割り当て、朗読の練習をする。

③グループの他のメンバーの意見も参考にしながら、登場人物の性格や、その場面における心情が伝わるような読み方を工夫しよう。

④グループごとに朗読を披露し、感想を交換しよう。また、朗読をすることで気付いたこと、わかったことなどを話し合ってみよう。



**課題**では、内容理解の問いや、その内容を踏まえた話し合いの課題を設定しています。

古典文法についても、**実践的な読解**に活かしていけるような課題を設定しています。

本文を台本に見立て、**せりふとして朗読**する活動を設定しています。文学国語の戯曲の学び、コミュニケーション教育などにもつながります。

# 四面楚歌

「鴻門の会」の数日後、項羽は軍勢を率いて咸陽に入った。そして、すでに劉邦に降伏していた秦王子嬰[1]を殺し、宮殿を焼き払い、財宝を奪って引き揚げた。

項羽は、ともに戦った将軍たちに王の称号と領地とを与え、自分自身も西楚[2]の覇王と名のって彭城[3]に都を定めた。その一方で、劉邦には僻遠[4]の巴蜀の地を与え、漢王とした。

天下は項羽の威光の下に平定したかに見えた。しかし、ほどなくして漢王（劉邦）は項羽に反旗を翻し、他の諸侯の間にも、領地の配分にまつわる不満から離反する者が出た。これを鎮圧するために、またも項羽は戦場を駆け巡る身となった。人望において勝る漢王は、しだいに項羽の最大のライバルとなっていった。やがて項羽は、漢の策謀によって范増と仲たがいし、ついにこの名参謀から見捨てられてしまった。

重なる戦闘の中で項羽の兵は疲れ、食糧は乏しくなった。彼は漢と天下を二分して、西を漢、東を楚とする盟約を結び、兵を引いて東へ帰っていった。

漢では張良と陳平が、楚軍を撃滅する好機だと進言した。漢王はこれを聞き入れて諸侯の軍と連合し、項羽を追撃しながら垓下[5]にこれを囲んだ。「鴻門の会」から四年後の前二〇二年のことである。

**1 子嬰**　？～前二〇六年。始皇帝（↓36ページ注1）の孫で、秦の最後の王。在位四六日。

**2 西楚の覇王**　西楚を拠点として諸侯の上に立つ王。「西楚」は淮河の北側一帯の地。

**3 彭城**　現在の江蘇省徐州市。

**4 巴蜀**　現在の四川省一帯。険しい山々に囲まれており、当時は流刑地とされていた。

**5 垓下**　現在の安徽省宿州市霊璧県の南東の地。

関連する三つの漢詩を読み比べ、さらに読解を深める活動を設定しています。

## 学びを広げる　項王の生きざま

次の三つの作品を読み比べてみよう。

題[1]烏江亭　杜牧

勝敗兵家[2]事不[3]期
包羞忍恥是男児
江東子弟多才[4]俊
巻[5]土重来未可知

勝敗は兵家も 事 期せず
羞を包み恥を忍ぶは 是れ男児
江東の子弟 才俊多し
巻土重来せば 未だ知るべからず

烏江亭　王安石

百戦疲労壮士哀
中原一敗勢難廻
江東子弟今雖在
肯与君王巻土来

百戦に疲労し 壮士哀しむ
中原に一敗し 勢ひ廻らし難し
江東の子弟 今在りと雖も
肯へて君王と 巻土して来たらんや

◇杜牧　八〇三年～八五二年。字は牧之。号は樊川。晩唐の詩人。

◈杜樊川詩注

1 題　（壁に）詩などを書きつける。
2 兵家　兵法に優れた者。軍事家。
3 不期　予期できない。
4 才俊　才能に優れた人物。
5 巻土重来　風が土を巻き上げる勢いで再び吹いてくる。失敗した者が再び力を養ってやり直すこと。「巻」は「捲」とも書く。

◇王安石　一〇二一年～一〇八六年。字は介甫。号は半山。臨川先生とも。北宋の政治家・文人。

◈臨川先生文集

1 中原　古代中国の中央部で、河南一帯、黄河中流から下流にかけての地域。



烏江　李清照

生当[1]作人傑
死亦為鬼雄[2]
至今思項羽
不肯過江東[3]

生まれては当に 人傑と作るべし
死しては亦 鬼雄と為らん
今に至るまで思ふ 項羽の
江東に過ぎるを肯んぜざるを

◇李清照　一〇八四年？～一一五一年？。号は易安居士。北宋の女性詩人。

◈李清照集

1 人傑　特に優れた人。傑出した人物。
2 鬼雄　幽霊の中の英雄。
3 過　行く。移る。

▣それぞれの詩に表現された、項王に対する思いを説明してみよう。

▣項王の生きざまについて考えたことを話し合ってみよう。

◈史記
歴史書。司馬遷の著。百三十巻。上古から前漢の武帝（前一五六～前八七）までの歴史を、本紀・列伝などに類別して叙述し、「紀伝体」と呼ばれる形式を確立した。先行する歴史書や自分で集めた資料に基づく記述の確かさに加えて、高い文学性を備えている。

◇司馬遷
前一四五年？～前八六年？。字は子長。前漢の歴史家。武帝の時に太史令となる。前九九年、匈奴に降伏したと伝えられた李陵将軍を弁護して武帝の怒りにふれ、宮刑に処せられたが、その屈辱に耐えて宿願の『史記』を完成した。

日本の漢詩文を取り上げた単元では、現代につながる漢文の意義・魅力を学びます。

## 無題

夏目漱石

秋風鳴二万木一
山雨撼二高楼一
病骨❶[1]❷[2]*如レ剣ノ
一灯青❖[3]欲レ愁ヘント
5

（漱石詩集）

漱石が晩年を過ごした書斎（復元）

◇**夏目漱石**　一八六七（慶応三）年～一九一六（大正五）年。名は金之助。漱石は号。小説家・英文学者・漢詩人。東京都の生まれ。

◈**漱石詩集**　夏目漱石の漢詩集。『漱石全集』第十八巻所収。

**1 病骨**　病気の体。漱石は一九一〇（明治四三）年八月に静岡県伊豆の修善寺温泉で吐血し、人事不省に陥った。この詩は、一命を取り留めた漱石が病床で作った一首。

**2 稜**　角張っている。

**問❶**「稜如レ剣」とは、どのような様子をたとえているのか。

**3 一灯青**　一つの青白い灯火。

❖**句法**

- 不能ハ～スル　～できない。［不可能］
- 欲ス～セント　～しようとする。［願望］

＊**訓読で注意する語**

従　可　如





**漢文を読むために❷**

### 歴史はいかに記述されたのか

歴史を記述するという行為は、中国の知識人にとって、きわめて重要なことであった。『史記』以前に書かれた中で、特に重視されていた歴史書が『春秋』である。孔子（↓72ページ）の手によって編纂されたという逸話もあり、その記述は「春秋の筆法」と呼ばれて貴ばれてきた。この『春秋』は、何年何月にこういう重大事件が起こったというように、時系列に従って年代順に出来事を書き記す「編年体」という形式で書かれているため、物事の全体像や前後関係を整理して把握するのには便利である。しかし、数年に及んだ事件の発端から結末までの詳細がわかりづらく、また、ある人物の生涯を知ろうとするには不便だった。

『史記』の作者、司馬遷はこの形式を採らず、各人物ごとに記録をまとめるという編集方法を採用した。皇帝の伝記である「本紀」に始まり、臣下の伝記である「列伝」に終わる分類がなされており、こうした歴史の記述形式を「紀伝体」と呼ぶ。『史記』は、十二の本紀と七十の列伝のほかに、各国の王や諸侯に関する伝記である三十の「世家」、天文・地理・歴史など分野ごとの歴史を記した八つの「書」、各種の年表である十の「表」から成り、記述された時代は上古から前漢の武帝までのおよそ三千年にも及ぶ。紀伝体が優れている点は、人物ごとに伝記がまとめられているので、ひとりの人間がいかに生きたのか、そしてその人をめぐっていかなる事が起こったのかというような、個人の生涯をたやすく知り得ることにある。司馬遷の人間に対する興味が、「紀伝体」による記述のスタイルを選ばせたのだろう。その反面、編年体が有していた、時代の推移や事件における時間的な前後関係が読み取りやすいという利点は失われてしまった。「表」を添えるという工夫はなされているが、一つの事件が複数の列伝に記載されている場合には、記述の視点が異なるため経緯がわかりづらくなるという別の欠点も生じた。

しかしながら、『史記』が後世に与えた影響は大きい。後漢の班固が編纂した『漢書』も紀伝体を採用し、これ以降も王朝の正統な歴史書である「正史」は全て紀伝体の形式を踏襲した。司馬遷が「史聖」とも呼ばれる所以である。

**単元の振り返り**

- 作品の背景を理解し、登場人物の立場や心情などを的確に読み取ることができたか
- 項王の生き方について話し合い、考えを深めることができたか
- 史伝への関心を深め、さらなる学びへの意欲をもてたか

単元ごとに**振り返り項目を明示**。観点別評価にもつながります。

紙面では**図版や写真**を豊富に掲載し、古典世界に効果的に触れていきます。

# 「三国志」の世界

三世紀初めの後漢末の中国では、曹操が率いる魏、漢王朝の継承を唱える劉備の蜀、孫権が守る呉の三国が鼎立、群雄が割拠して覇を競った。

その激動の時代を舞台とした物語は、時を超えて人々に愛され続け、「三国志」の世界と呼ぶべき一つの領域を形成している。

※人形は人形劇『三国志』（川本喜八郎）による。

巻末付録では、関連図版や文法解説など、**随時参照できる情報**を掲載しています。

# 漢文基本句法



● 教材中で❖を付した句法のうち、一部類似のものをまとめ、基本的な句形を整理した。用例は本書から採りあげ、典型的な形での初出ページとともに示し、その他掲出ページは用例下に示した。

● 用例の多い「不」などは、基本的に句法欄には掲げず、このページでは句形の頭に◎をつけて初出の用例のみ示した。

● 「若」など、一字の句法で他の意味・用法がある場合には、訓読で注意する語（↓204ページ）にまとめた。このページには用例は示さず、句形の上に＊をつけた。

## 【否定】

| | | |
|---|---|---|
| 不◎ | ～（セ）ズ | ～しない・～でない |
| | 四白竜不点眼睛。（14・2） | |
| 未◎ | いまダ～（セ）ズ | まだ～していない |
| | 未点眼者（14・4） | |
| 非◎ | ～（スル）ニあらズ | ～ではない |
| | 非人也。（66・2） | |
| 無◎（莫・亡） | ～（スル［モノ・コト］）なシ | ～がない |
| | 軍中無以為楽。（38・11） | |
| 無（莫・勿） | ～（スル［コト］）なカレ | ～するな・～してはいけない |
| | 莫笑農家臘酒渾（31・1） | 79 86 |
| 禁止 不可 | ～（スル）ベカラズ | ～してはいけない |
| | 不可屈致也。（156・11） | 159 173 |
| 禁止 不可 | ～（スル）ベカラズ | ～できない |
| | 疾不可為也。（16・4） | 21 87 112 121 139 177 179 196 |
| 不可能 不能 | ～（スル［コト］）あたハズ | ～できない |
| | 不能有所中傷。（18・6） | 41 84 87 92 126 132 144 147 176 188 |
| 不可能 不得 | ～（スル［コト］）ヲえズ | ～できない |
| | 荘不得撃。（39・1） | 121 143 192 |

## 【疑問・反語】

疑問・反語は①文末に疑問の助字を用いる場合、②文頭に疑問語を用いる場合、③その両方を用いる場合、の三種類がある。また、同じ形で詠嘆・推量の意味もあり、文脈に応じて訳し分ける。

### ◆文末に疑問の助字を用いる場合

| 乎◎（也・哉・邪・与・耶など） | | |
|---|---|---|
| 疑問 | ～か | ～か |
| | 兵可使如率然乎。（22・4） | |
| 反語 | ～や | ～か、いや～ではない |
| | 世復有此英雄男子乎。（90・9） | |

※原則として、疑問を表わす場合は「か」、反語を表わす場合は「や」と読むことが多い。

### ◆文頭に疑問語を用いる場合

| 何（何遽・奚・庸など） | | |
|---|---|---|
| 疑問 | なんゾ～（スル） | どうして～か |
| | 何苦沾衣如此。（106・4） | 127 180 |
| 反語 | なんゾ～（セ）ン | どうして～か、いや～ない |
| | 何遽不為福乎。（20・3） | 27 42 48 59 65 105 125 186 |

※「何」は最も基本的な疑問語で、様々な内容を問う。人や物を問う場合は「なんゾ」、場所を問う場合は「いづク（129）」、名詞の修飾語となる場合は「いづレノ（75、78、139）、なんノ（55、181）」など、場合に合わせて訓読する。

# 訓読で注意する語



● 教材の本文中で＊を付した訓読で注意する語を、五十音順に掲げた。数字は教科書の本文ページを示し、参考・学びを広げるなどの文中に出てくるものは()に入れて示した。

● ◆を付したものは、漢文基本句形（↓200ページ）を参照。

**悪**［アク・オ］
あシ・わろシ・あく　悪い・良くない
◆いづクンゾ・いづクニカ　どうして・どこで
にくム　嫌う・嫉妬する　22 62 66 144

**已**［イ］
すでニ　すでに　42 46 49 69 87 104 114
やム　終わる・終える・やめる　59 63 128 118 157 127 159 139 173 146 190 177 191
いやス　除く・治療する
◆のみ　だけだ［限定］

**以**［イ］
もつテ　～によって［手段・方法］／～にもとづいて［根拠・観点］／～によって［理由・原因］／～に照らして［基準・資格］／～のときに［時間］／～に対して［目的・対象］／～から［場所・起点］／そして・その上［単純な接続］／しかし・かえって［逆接］
もちヰル・もつてス　用いる・使う　58 63 89 90 115 144 165 58 176
ゆゑ　理由・原因

**矣**［イ］
置き字　［完了／願望／判断／命令／感嘆／疑問／反語／限定］　40 63 65 69 90 92 112 118 140 147 170 173 175 177 179 181 186 190

**為**［イ］
ため　～のために・～なので［目的・対象／原因・理由］
なス　行う・演奏する
なル・なス　～となる・～と見なす　46 68 118 165 178 192
つくル　作る・文章を書く
をさム　治療する・治める
たり　～である　42 58 88 92 114 186 16

**易**［イ］
やすシ　むずかしくない・おだやかである・簡単である　111 147 177
かフ　変わる・変える

**因**［イン］
よりテ　～にもとづいて［原因・根拠］／～にしたがって［機会・条件］／～にたよって［依頼・依拠］／～を通して［経過］／すぐに・そこで［順接］　18 38 64 78 90 102 111 115 139 147 156 179

**于**［ウ］
ゆク　行く　124
置き字・おイテ　～で［条件］／～から［原因］／～を・～に［対象］／～より［比較］　16 157 159 160 176

**亦**［エキ］
また　～もまた・～も同じく　18 39 48 (51) 78 105 139 144 148 157 170 172 186 196

**焉**［エン］
置き字　～である［判断］／～だろうか［疑問］／～だなあ［感嘆］　16 67 69 75 92 171 177 187 190 194
◆いづクンゾ・いづクニカ　どうして・どこで